

[成果情報名] アベマキを使った原木シイタケ栽培の植菌後3年目までの発生傾向

[要約] アベマキを使った原木シイタケ栽培の植菌後3年目までの発生量は、成形駒 M290 を使った場合にいずれの植菌密度でもコナラより多い。発生量が増加するに従って小葉の発生割合が増加し、中葉及び大葉の発生割合が減少する。

[キーワード] シイタケ、アベマキ、原木栽培、木片駒、成形駒

[担当] 農林技術開発センター・森林研究部門

[連絡先] (代表)0957-26-3330

[区分] 林業（特用林産）

[分類] 指導

[背景・ねらい]

近年成形駒が出回っているが、従来の木片駒を使った場合の生産量と比較した事例が少ない。特にアベマキを使った事例はほとんどないことから、生産者は経験に基づき原木栽培を行っているのが現状である。アベマキに成形駒を使った場合のシイタケ発生傾向を明らかにし、生産者へ情報提供するとともに、アベマキを使ったシイタケ栽培指針を作成する。

[成果の内容・特徴]

1. アベマキを使った原木シイタケ栽培の植菌後3年目までの発生量は、成形駒 M290 を 6,000 個/m³ 植菌した場合に 44kg/m³ で最も多く、コナラの約 1.6 倍である（図1）。
2. 発生量と規格別発生量の割合との関係は、アベマキに成形駒 M290 を植菌した場合は、植菌密度が 2,000 個/m³ から 6,000 個/m³ へと増加するにしたがって発生量が 34kg/m³ から 44kg/m³ へ増加し、それにしたがって小葉の発生量の割合も 13%から 46%へと 3.6 倍になるのに対し、中葉の発生量の割合は 78%から 50%、大葉は 9%から 4%へそれぞれ 0.6 倍、0.4 倍になる。（図2）。

[成果の活用面・留意点]

- ・ここに掲げたデータは、対馬市峰町志多賀にある水田跡地に生育したスギ林内に周囲を寒冷紗で囲って設置したホダ場での試験結果に基づくものである。

[具体的データ]

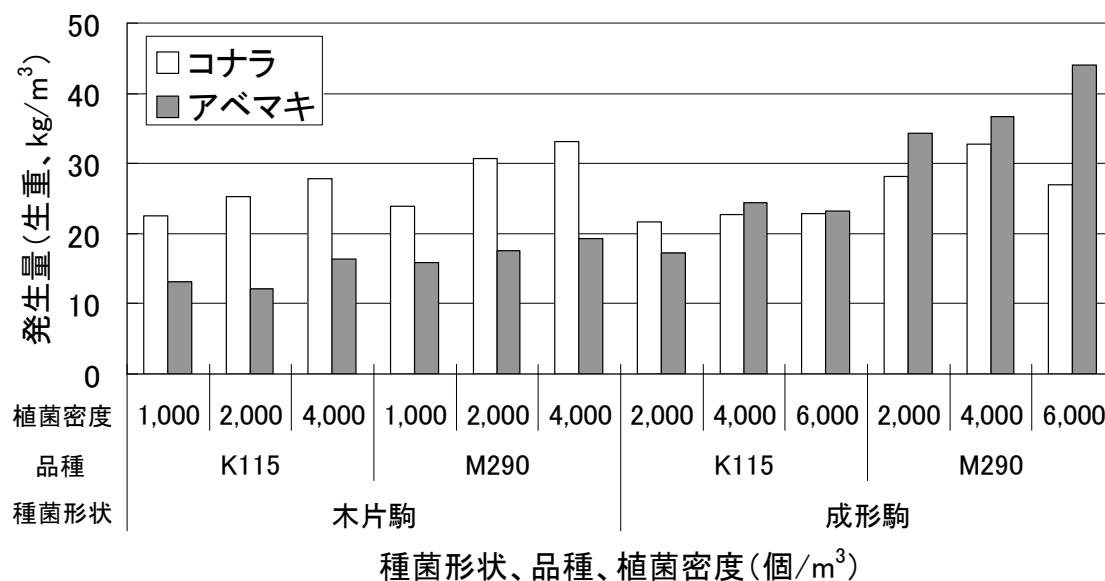


図1 植菌後3年目までの原木樹種別に見た発生量

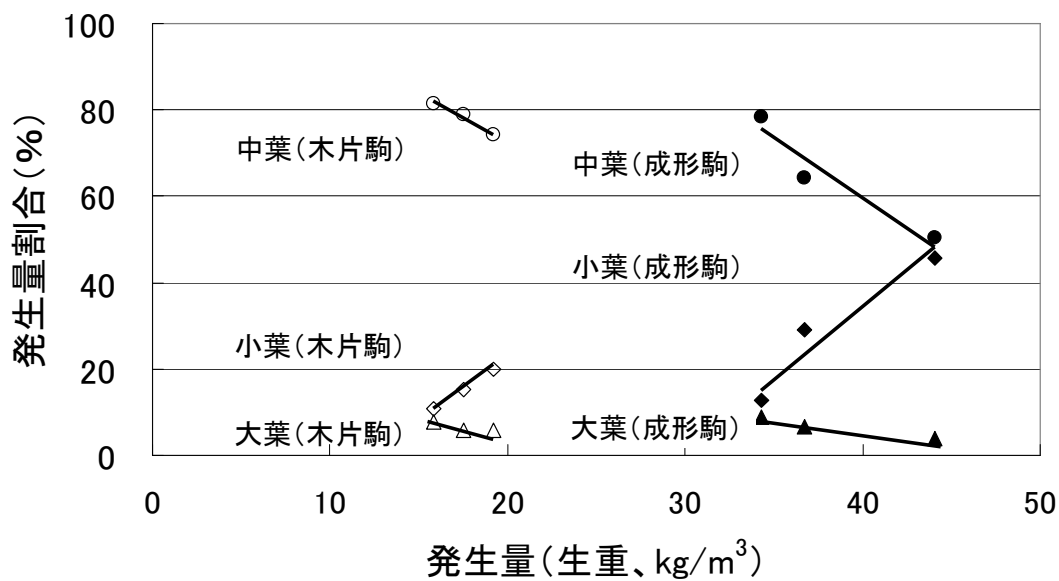


図2 発生量と規格別発生量割合(アベマキ、M290)

[その他]

研究課題名：対馬しいたけのブランド確立のためのアベマキによる栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2005～2009年度

研究担当者：久林高市